



清原慶子市長



宮崎吾朗さん

(アニメーション映画監督・三鷹の森ジブリ美術館初代館長)

# 大事にしなけばいけないもの 継続していくことの大切さ



三鷹市立アニメーション美術館「三鷹の森ジブリ美術館」は昨年、10歳の誕生日を迎えました。民間と行政が協力し合って設立、運営する画期的な日本初のアニメーション美術館を立ち上げた中心人物は、昨年夏に監督第2作『コクリコ坂から』が公開された宮崎吾朗さんでした。

美術館の管理運営を行う公益財団法人徳間記念アニメーション文化財団の理事として、市長就任前の設立時から美術館の運営に関わってきた清原慶子市長が、宮崎吾朗さんに館長時代の思い出や映画づくりの裏話、そして三鷹市との関わりについてお聞きしました。



## 自由な鑑賞を保証するために 市の理解を得て、入場を制限

**清原** 吾朗さんはジブリ美術館の初代館長でしたが、どんな経緯で就任されたのですか。

**宮崎** 美術館を作るので中心的な人物が欲しいということで、プロデューサーの鈴木敏夫に「やってみないか」と言われて、1998年の10月にスタジオジブリに入社しました。すると1週間もしないうちに、美術館の事業会社の社長をやらせられて。

**清原** その当時、おいくつだったのですか。

**宮崎** 31歳です。

**清原** その流れで館長も務められたんですね。

**宮崎** 館長は名誉職でもっと偉い方がなるものだと思っていたけれど、鈴木に「現場の責任者がやるべきだ」と言われて、結局僕がやることになったんです。

**清原** どこか参考にした美術館はあったのですか。

**宮崎** なかったですね。宮崎駿の発想をかたち



清原 慶子市長  
Keiko Kiyohara

昭和26(1951)年生まれ。慶応義塾大学、同大学院で学んだ後、ルーテル学院大学教授、東京工科大学メディア学部教授・学部長を経て、平成15(2003)年、第6代三鷹市長に就任(現在3期目)。内閣府、総務省、国土交通省、文部科学省などの委員や全国市長会「共通番号制度」及び「子ども子育て新システム」専門部会構成員、東京都市長会厚生部会長、公益財団法人徳間記念アニメーション文化財団副理事長などを務める。「市民参加と協働」「行財政改革」の2つを市政の基礎に位置付け、「都市再生」と「コミュニティ創生」を最重要点とした高環境・高福祉のまちづくりを推進している。

にするには、なぜ普通の美術館はおもしろくないのか？を分析しなければならなかった。結局普通の反対をすればいいことが分かりました。逆転の発想ですね。それに行政と民間が一緒に事業を立ち上げるのも当時はまだあまり前例がなかった。

**清原** 民間の力を行政が生かす。私は当時一市民でしたが、とてもユニークな取り組みが始まると思って期待していました。

**宮崎** 正直、三鷹市だからできた、という面もありました。直前になって入場予約制を導入できたこともそのひとつです。建物そのものがある種作品の世界に入っていくような美術館で、来場者には自分で歩いて自分で見て、映画を体験するのと同じような感覚で自由に受け止めてほしいという思いがあったので。

**清原** 見る側の自由な鑑賞を保証するために入場人数を制限し、安全にそしてゆったりと展示を楽しんでもらう。それが実現したのは、ジブリと三鷹市の想いがひとつだったからだと思いますよ。また、日本ではあまり知られていない海外のアニメーションを紹介するなど、企画展示についても前例のない試みをされていました。

**宮崎** ジブリじゃないものをあえて扱うことで自分たちも息切れしないように思っていました。

## 主人公を理解するプロセスが 映画づくりのプロセスそのもの

**清原** 昨年は映画『コクリコ坂から』が公開されました。2作目の監督作品ですね。制作のエピソードなどを教えてください。

**宮崎** まず最初に、美術館で働いている60代の女性に話を聞きました。

**清原** 当時、主人公の海ちゃんだった世代の